

小説は作者が玄人だろうと素人だろうと基本は虚構なのだが、その基本的な特性を崩れないように補強しているのは細部の具体性とか正確さだと教わっている。

ところが扱うテーマや小説舞台によっては、このことが作品の「消費期限」に繋がることもある。例えば犯罪を軸にする推理小説や警察小説などでは刑法や刑事訴訟法が改正されると、その条項や解釈を前提とした部分が当然「誤り」に変化してしまう。相続や損害賠償などを引いた流れでは、民法をはじめとする関連法規が変わると、細部補強に使ったそこが障碍になってしまうのだ。この理は解剖など科学捜査の進歩などでも同様になる。ただし、小説の中で登場人物の台詞の中で、あるいは地の文で背景となっている年代、年月を読者に「告げて」いれば非難は避けられる。もちろん免罪符になるだけで、作品としての緊迫感、リアリティは減殺を免れない。プロの人の作品は読者の方で自然に納得してくれる流れになると思うが、その点アマチュアとしては辛いものがある。未熟、誤謬がまず指摘されやすいので、消費期限を意識せざるを得ないのが何とも苦しい。

## ヘクソカズラの遺産

馬場駿

少しゆったりしたスラックスをはき、赤いウインドブレーカーを羽織ってからドアを開けた。まだ薄暗い。遠い空だけがもうすぐ日の出だと教えている。百円均一で買ったホルダーの鈴が鳴らないように、強く握って鍵を差し込む。カタンと小さな音がして私は外の人になった。考えてみれば不思議だ。たしかに泥棒の侵入は防げるが、鍵を失くしたとたんに自分自身も入れなくなるのだ。そのリスクを外出のたびに冒している。

いまのコーポラスに住み始めてからずっと、塩野が部屋の中に居るときでも同じようにしてきた。いつそ鍵を失くせばずっと家庭という名の檻の外にいられた。そうなのか。期待していたのだろうか。心の奥底の部分に棘が刺さるのを感じた。塩野はもう居ないのにきちんと閉めた。部屋の中にも、外にも、護るべきものは何も無い

のに。

外廊下を歩く靴音が身体に響いた。いや、いつも以上に大きく感じた。一睡もしていないのだ。きっと、そのせいだ。

三階から二階へと下る階段で背広姿の若い男とすれ違った。

「散歩ですか」の声に『大きなお世話よ』と心で反発して、朝の挨拶もしなかった。三十所帯も住んでいるのに、誰が誰だか分かるものか。気安く口はきけない。そう思った。

「朝帰りなんて、ろくなもんじゃないわ」と、一階に下りてから小声で毒づいてもみた。

コーポラスのそばを流れている川は嫌いではない。最初の頃は瀬音が強い雨音のようで気になって仕方なかったが、いまは区別もつくし、店のことでイライラしているときには、多少なりとも癒されることがある。

塩野は時折、ベランダに出て小一時間も川の流れを見ている。

何を考えているのかと聞いたことがある。

「川ってな、違う水が次々にやってきているのに、僕ら

の目に見える川面の姿は同じなんだ。それって凄いいことだよ」

愚にもつかない内容に呆れて「布団干すんだからどいて」と大声で追い立てたものだ。

眼下に濃墨色の流れがある。年に数百回も渡る橋なのに、手摺から身を乗り出して水と話したことなど、一度も無い。たまに二人でこの橋を渡ることがあった。隣で喋っていた塩野がいらないのに気づくと、たいがい後ろの方で立ち止まり、呆けたように川面を見ていた。

最期まで理解できなかった夫、それが塩野。

真正面から飛んできた白い鳥が、羽を大きく広げて瀬に下り立った。じつと見ていると、長めの首を左右に振ってから、橋上の方に視線を固定した。

『まさか』と思い、ゾクリとした。

来いというのだろうか。飛び降りると。私は合掌をするやいなや、足早に橋の上を駆け抜けた。

空が少し明るさを増してきた。

小走りでも五十五歳、年齢には勝てない。広い県道の横断歩道を渡りきったところで、呼吸を整えた。

何から逃げたというのだろうか。自分自身を笑い飛ばし

たくなつた。

『わたしらしくもない』

そう思つていま来た橋の方角に目をやると、階段ですれ違つた男が、信号機の下に立つて、こちらを見ている。スクランブルで青なのに動こうとしない。

今度は県道沿いに歩道を走り出した。

『いったい何なの、あの男』

ウインドブレーカーのポケットから携帯電話を出し、操作をしながら逃げる。

「マサルさん、すぐ来て。お願い、何だか変な男に尾行されてる」

「分かった、きのうの今日だ、まだ近くのホテルにいる」  
叔父の即答に、うつかり目頭を熱くした。

夜明けの街で開いている店と言えばコンビニエンス・ストアだ。叔父は約束の場所に、タクシーでやってきた。幸いにも電話をかけた時点で、すでに起きていたらしい。連絡してから十五分と経っていない。

嬉しいことに、店の片隅が小さな喫茶店のようになつていたし、客は私一人だった。

「何だい、男なんか頼らない主義じゃなかったのか」  
「こんなときぐらいいいじゃない。それを、のつけから皮肉はないわよ」

からかわれるのには慣れているが、私が口を尖らせて抗議したので、叔父は急に真顔になった。

「そうだな、悪かつた。いつも気丈なお前がつて意外だったから、ちよつとな」

「眠れなくて……」

「だろうな。でも今日の文子は弱々しくてなかなか魅力的だ。塩野になんか見せたことないんだろ、そういう顔」

「それも十分に嫌味よ」

二人そろつて口辺だけで笑つた。

「ま、とりあえず今は、外に不審人物はいなかった。神経が参つてるのかもな」

「それだけならいいんだけど」

誰かに事故当日の一部始終を伝えたかつた私は昨日、遠方から駆けつけてくれるという叔父の声を聴いて、急に激に心身の緊張がほぐれていくのを感じたものだ。

叔父は地方の大学の法学部を出てすぐに精密機械の会社に入り、長年一人で法務を担当している。けつこ

理屈っぽい人だが、博識で頼りにはなる。

「じゃ何か、事故現場から救急病院、そこで死亡じやなくて、現場で救急隊が死亡を確認、現場保存を図ったうえで警察、だったのか」

聞かれるままにかいつまんで事故の概要を話すと叔父は、腕組みをしてから、そう言った。

「検視をすると行ってたわ、法律的な義務だって、否認なしだった」

いまだに詳しいことは分らないが、拒める性質のものではないということだけは解かった。

「救急隊が運ばなかったのは、塩野の死亡が確認されたからだ。救急隊は死体を運びはしない。警察は異状死体として、いや、変死体と言った方が一般的かな、とにかくそう判断したうえでとりあえず行政検視、必要があれば行政解剖になるだろうな。となると、ケリがつくまで火葬はできない」

叔父の口調がいつも通りになった。

「変死体って言うけど、いつも通ってる階段から落ちて、打ち所が悪かったただけなのよ、それを。しかも身内の私と一緒にいてのことなのよ」

「文子、あくまでも規則だ。特に何かを疑ってのことじやないだろう」

「疑うって何をよ」

「いや」と言ってから叔父は、一瞬鋭い目をして紙コップのコーヒートを口にした。

「あ、それ」

ただ叔父を店内で待っていたのでは、さすがに厚かましいと思ひ、とりあえず一つだけ自分で淹れるタイプのコーヒートを買っておいたのだ。

「いま塩野はどこに居るの」

すでに一口飲んでいたのだが、言うのは止めて質問で誤魔化した。

ずっと気になってはいた。現場から運び去られた遺体はどこに置かれ、何のために、何をされるのかと。

「この程度のとうか、ま、地方の街のことだ、とりあえず警察署の霊安室ってとこかな。今日の夕方あたりに帰ってくるさ。それより尾行されてるって話な、変な男、心当たりないのか。まあお前じや、性犯罪の類とは無縁だろうが」

「何それ」と、一応抗議で顔を歪めてから笑顔に変えた。

軽口で緊張をほぐそうとしてくれているのだ。

もしかしたら、叔父の言う通り、自分でも気づかないうちに心身が、常軌を逸していたのかもしれない。

「ただの、出勤するサラリーマンだったのかも。だったらご免なさい」

来てもらって落ち着けただけでも感謝だ。

少しうなだれてから視線を叔父に戻した。

「とにかくホテルで三泊はする。塩野は初対面から気に食わん奴だった、葬儀参列そのものよりもお前が心配だ」  
口元は笑顔のときのそれだが、叔父の目は笑っていないかった。

「ところでその葬儀だ。まだ段取りもつかないだろうが、予定というか、どうするんだ。斎場で一般的な葬儀をするのか、こじんまりと密葬ですますのか。家持ちなら自宅で葬式もできるだろうが、外目は綺麗でかいコーポラスでも結局賃貸アパートだろ、入居時の約定でたぶん葬式は不可能だろうな」

確かにどうするかだけでも決める必要があった。頭の両脇が少ししびれてきた。

「密葬なんか駄目。世間さまってやつに何言われるかわ

からないわ。それに小さいけど理容室やつてるのよわたし。普通に巾着なきやお客さんたちに不審に思われるわよ。これからだって、ここで一人生きていくんだし」

感情的になつている。うっかり唇を噛んだ。

「分かった。しかしそれも故人の遺志となれば解決する。文字、塩野は遺言を残してないか」

「遺言でいったって彼は事故死なのよ」

死期を予測している病人ではないのだ。

「いや、終活だよ、生前葬がはやる時代だ。自分の死後のあれこれを遺言で指示している奴が山ほどいるらしい。奴はあれでもかなりの教養人だ。遺産の多寡にかかわらず、まず在るな遺言は、うん」

遺言のことなど、昨日はまったく考えもしなかった。生命保険は気になったが、それさえどうなのか何も知らない。

「うち、経済的には他人だったの」

「何？」と叔父が文字通り首を傾げた。

塩野との間に子供はいない。家計は綺麗に二分分して、しかも家賃など比較的多額なものは項目別に担当を決めていた。生命保険、損害保険、疾病保険などもそれぞれ

れが自分のために掛け、その内容など全く夫婦間では知らせあつてはいない。各自の預貯金についても同様だった。小さな理容室経営も一人でやり繰りをしていた。

「なんて奴だ、あいつは」

叔父が握り拳でテーブルを一つ叩いた。もちろん加減はしていたが。

「わたしよ、言い出したのは。塩野との結婚、承知する条件としてね」

叔父の口が、ポカンと開いたままになった。

玄関の真つ黒なドアに訪問者を確認するための小さな覗き穴がある。夜空の一等星のように輝いている。その光から真つ直ぐに視線を落とすと、塩野の黒い靴が踵を揃えているのが見える。叔父にタクシーで送られて帰宅したとき、その靴を手を取つて下駄箱にしまおうとして、やめたのだ。

「俺が留守するときは黒い靴を出しておくといひ。女の一人暮らしたと甘くみられるからな」

塩野からこれを聞いたときは『何言つてるの、吹けば飛ぶような体しちやつて。頼りになんかしてないわよ』

と、そんな気持ちだった。

もうこれから先、ずっと塩野は居ない。

キッチンに在る、八分目ほど残っている一升瓶は要らない。

バスルームに在る男物の、バスタオル、フェイスタオル、歯ブラシ、洗面器、：塩野はそんな物の中に居る。

十畳の洋間の右側の全てを占めた書棚。大小の、厚い薄いもありの、色とりどりの本たちのどれにも私は、興味がない。それらを取り出す塩野の手も、もう無い。

煮物に使う。ゴミとして出す。古本屋を呼ぶ。そのたびに塩野の「形」は小さくなつていくだろう。そうして終には生活していた痕跡すら無くなる。

遺された自分も、より小さな貧家を求めてここを去つていく。一緒に暮らしていても「独りで生きていく」と思つていた。それで何の苦痛も感じず、寂しくもなかった。だとしたら、本当に一人になつたいまが、自分にとって何だというのだろう。事故以前の自分と同じではないはずだ。現に同じだと、そう思い、そう言い聞かせた。急に遺産の多寡や遺言を口にした叔父の顔が浮かんだ。

『向き合わなければ、現実と。これからの自分と』

その想いが手足を機敏に動かした。

あらゆる抽斗は飛び出し、整列していた書物も、疑いをかけられたものが引き抜かれたことで大きく乱れた。書類が入りそうな数個のバッグもすべて口を開けている。

「無い。どこにも。何も出てこない」

遺言も、実印も、通帳も、カードも、そのほかの資産に繋がる一切のものが。金銭出納帳すら見つからなかった。

あとはパソコンだが、操作法を知らない。

「マサルさん、パソコンできるわよね。午後こっちに来られる？ 家探したけど何にも出てこないの」

パソコンを確認すればすべてが終わると踏んで、二時間前に別れた叔父に電話を掛けたのだが――

訪問客らしい。チャイムが鳴り始めた。

「とにかくお願い。切るわよ」

「分かった」という叔父の声が元氣だ。

「どなたですか、いま取り込み中なんですけど」

「ちよっと昨日の事故の確認をしたいので。警察です。」

開けてください」

鎖を掛けたままでドアを少し開けた。髪の毛の薄くなった中年男と、大柄な青年が立っていた。二人とも背広姿だ。青年の方には何となく見覚えがある。

ドアを開けると、青年の方が「ちよっと失礼」と私の背後に回った。

「ほほう、これはこれは」

中年の刑事が極限まで散らかった室内を覗き見して顎を撫でた。

「何か必死で探しているようですね」

心裡を突かれたようで一瞬慌てた。取り繕おうとしたが、言葉が出なかった。

「詳細に伺う予定ですから、ここではちよっと。署までご同行願います」

「塩野は、夫は、いつ戻してもらえるんですか。そちらが先じゃありませんか」

声が少し震えた。

「ま、それも含めまして」

「分かりました。着替えはさせていただきますね、こんななので」

私は部屋着用のジャージを摘まんで言った。

「おい、ベランダに出てろや。奥さんが着替える」  
振り返って若い刑事と向かい合った。

「あなただったの、今朝の尾行。やつと記憶がはつきりしてきたわ」

「何のことですか」とベランダに向かう刑事。

「奥さん、中からカーテンを引いてください。それから目の前の中仕切りのドア、閉めて。それなら我々が居てもいいですよ」

中年刑事はあくまでも落ち着いている。

「あ、その靴、そのままです」と指を差してまで注意をした。並んでいる塩野の靴を刑事が動かそうとしたからだ。  
「失礼。踏んじやいけないと思ひましてね」

頭を掻きながらも刑事は、一度つかんだ黒い靴をジツと見つめていた。

とんでもない勘違いなのだが、どうやら警察は私が塩野を殺したと思っているらしい。任意と言いながら、実際は容疑者の連行に近かったし、取調室の私の前には、部屋に来た二人とは別の刑事が陣取っている。

「二人で階段を降りていくときの位置関係はご主人が下であなたが少し後から、つまりあなたが上、で間違いないですか」

テレビドラマでも決まって尋問はしつこいが、相手をしているとかなり疲れるものだと思感した。自分たちが気に入る回答をしないと、何度でも同じことを聞いてくるのだ。

「位置が逆で、あなたが下からご主人を強く引つ張つて階段を転がした。本当はそうなんですよ」

「我慢していましたが、聞きますね」

「取り調べてるのはこちらですが！」  
「なぜそういうことにしたいんですか。私は事実を言ってます。上にいて塩野が足を滑らせて落ちそうになったからとつさに手を差しました。主人も左手を振って私の手を掴もうとしたんです。でも手はつながらなかった。押しても引いても、いません」

「そうだとしたら！ 首の骨が折れるほどの転び方にはならないんだよ、あの階段の勾配はそれほどきつくない、狭くもない。中間に踊り場があるタイプで、階段のステップ数も少ないんだ」



「打ち所が悪かったのよ、よくあるでしょ、そういうの」  
「じゃあ、角度を変えよう。なぜ目の前で夫があ！いか、死んでるとはそのとき分らなかつたとして、重症で倒れているのに、救急に連絡しなかつたのはなぜだ。一階に住んでる早川泉さんが、自分の携帯を使って救急車を呼んでる。しかもあなたは彼女に、現場で礼一つ言っていないんだ」

その通りだった。気が動転していて、塩野を揺すつて名前を連呼していた。携帯電話をバッグに入れていたことも忘れていた。にわかな事故に遭遇してパニックに陥ることが罪だというなら、それは罰を受けてもいい。しかしそれで殺人者だとされるなら、理不尽の極みではないか。私はそう言い募った。

「今朝も早川さんを見かけたはずだ。あなたは男と一緒にタクシーで来て、彼女を無視した。なぜだ。もうひとつ、あの男は誰だ。夫が事故で死んだ翌日の朝、しかも夜明け前に外出して、コンビニで男と会ってひそひそ三十分。警察はなあ、そんな未亡人を疑うようにと、教育されているんだよ」

駐車場に女性がいるのは見た。一緒にいたのは叔父な

のだが、色恋の相手と誤解されるのを恐れて、急いで階段を駆け上がった。それが助けてくれた水商売の女と同じ人だとは気が付かなかった。視線を逸らしつつ動いたのだから、当然と言ってもいい。

それにしても、と思う。私は昨日からすでに、容疑者として張り込みをされていたことになる。

「今朝会ったのは叔父です。その彼が葬儀のこともあり、主人の遺体はどこかと気にしています。塩野の遺体はいまどこですか」

「司法解剖に回した。つまり単なる事故ではなく、犯罪による死亡と判断したんだ。あえて知らせた。どうせ解剖でわかる。その前に言ってしまった。動機は何だ」  
何を言っても駄目だと思った。決めつけている。でも私はやっていけないのだ。たとえ自分しか知らない事実だとしても、そのことに確信をもって胸を張ろう。そう思った。

「私、帰らせてもらいます。こんど拘束して取り調べるなら、逮捕してからにしてください。」

「ほおう、やるねえ、なかなか」

「叔父は法学部出なので、誰か一人ぐらい弁護士を知っ

ていると思います。これから叔父に相談をします」

そう言うと、覚悟を決めてすつくと立った。

「警部補」と別の刑事が私の前を塞いだ。

「いい、今日は帰してやれ」

警部補と呼ばれた刑事はそう言うと、口をふらせて大きく息を吐いた。

「ありがとうございます。勉強になりました。それと、これからの私の行動、全部尾行してくださって結構です」立ち上がった警部補に一礼をした。

「そうさせていただきます。市外にお出かけの際は是非  
ご一報を」

からかい半分なのか、元の丁寧な口調に戻った。

「承知しました」

警察署を出たところで、足の力が一気に抜けた。昨夜、全く眠っていないのだった。

『何でこんな目に』

涙が、急に溢れ出た。

部屋の中はまだ半分も片付いていない。

叔父がパソコンデスクの前に座ってから小一時間も

経つだろうか。

私とはいえば、半眠りの中で、あのときの一、二秒を淡い映像で反芻していた。目の前に塩野の白髪があった階段のステップを三つ空けて後ろについていた。「あつ」という声を発して塩野は体勢を崩した。横顔が見えたから体が反転したのだろう。左腕を大きく回しながら全身が下の踊り場側に傾いた。とつさに右手を前に出し、塩野の左手首を掴もうとした。掌が合わさらない形だ。私の指先は塩野の左手の甲に触れただけで離れた。後ろにのけぞりながらも真正面を向いた塩野の唇が動いた。

「さよ」らしいとまでしか判らない。塩野はその後、空中で回転するような感じだった。いや、むしろ頭から真っ直ぐの落下だった。

最期の言葉になったのは「さよなら」だった。…そんな気がする。

「女子、起きたのか」

上体を起こして、髪をかき上げた。

「うん。少し楽になったみたい」

「見つからない。何にも無い」

叔父が椅子をどけて、その場で胡坐をかき、恨めしそ

うにパソコンを見上げた。

「コーヒーでも淹れようか」

「いや、今はいいいい」

「結局塩野は何一つ遺さなかつたってことよね、そんなことってあるかしら。変な言い方するようだけど、死ぬまで生活してたのよ、この世の中で」

「そこだ。それが鍵だ」

叔父はあくまでも推測だと念を押してから解説を始めた。

突然の事故で死んだのに、当日までの生活記録の一切がない。パソコンに刻んだデータなら、パスワードで保護すれば秘密は保てる。塩野のパソコンはパスワード無しで開けるタイプで且つ、アカウントも一つ。家族にも秘密にしたいという情報なら、いや、塩野の性格なら、絶対ありえないことだ。それなのにオープンにしてあった。セキュリティの必要がない、つまり重要な個人情報削除してあつたからだ。実印や証書の類、遺書などについては解かる。ここに無い、は実在しないということと同義ではない。もつとも考えられるのは貸金庫だが、ここには辿りつくための何ものもない。

「ビールあるか」

話の途中で叔父が唐突に言った。

「小さいのならあるけど。昼間よ、ちよつと」

「これが飲まずにいられるか。燃えてきたんだよ、塩野の奴に頭脳戦を仕掛けられている」

「まさか、考えすぎよ」

「いいから。喉が渴いてきた」

「ハイハイ」

「ハイは一つでいいんだ。お前のそれは、男をバカにしてるようではないか」

「面倒臭いのは塩野だけかと思つたら、同じなのね男は」  
冷蔵庫の蓋を掌で叩いて閉じてやつた。

「遺言書、あるよ。それだけは確実だ」

叔父は自信ありげにそういうと、三五〇〇〇の缶を一気に飲み干した。

「顧問弁護士がいるぞ、奴には」

「やだ、会社とか、お金持ちとか、そういう人に付くんではよ普通。ありえないわ、遺すべき財産もない塩野になんて」

「文子、お前、奴の結婚前からの資産を把握してるのか」

「全然。だって結婚後の資産もノータッチだもの」

「推して知るべしか。だと思つたよ。特有財産と言つてな、結婚後もそれは向こうのものだ。さつき顧問と言つたが馴染みの、と言ひ換えてもいい。幼馴染、中高の同窓生、大学の学友。いそうだと思わないか」

「弁護士が通帳や実印なんか預かるわけ？」

「人間関係が濃密なら考えられるけど、そこまでいかなくても、遺言書に財産目録をくつつけて、保管場所や分配についてまで記してあれば、どうだ。貸金庫だつて特定できるじゃないか。とにかく五里霧中を突破するカギは遺言だ」

不思議な発想の人だと、叔父の顔を見つめた。警察が尾行や張り込みを、叔父に対してもあからさまにしてくるかもと伝えて、迷惑をかけますと託びた時もそう思つた。

「無罪の証明は極端に難しい。公の予算を使ってそれをやってくれるつていうのに、迷惑がることはないだろ。お前は男を男とも思わない女だけだな、何があろうと人を殺したりする女じゃない。信じてるよ、お前を。気にするな、そんなこと」

そう言つて肩を叩いてくれた。

嬉しくて、つい抱き付いてしまった私。

「ビール、もう一缶飲む？」

「バカ、限度ぐらい知つてる。いないのか、本当に。塩野の知り合いに弁護士は」

何一つ知らない。それが当然だと思ひ、その方が楽でもあつた。

「そうだったな。できるだけ他人でいられる結婚。いつでも他人になれる結婚。十年前にお前から聞いたセリフ。憶えてるよ」

「キズを深くしないためには、相手の中に入り込まないこと、相手を自分の中に入れないこと」

塩野とのこの十年は、あるとき凍り付いた心を融かすまいとする歳月だったのかもしれない。

「哀しい女だな、お前は」

しばらくの間、沈黙があつた。

叔父は顎を上に向けて何か考えている。

私は、資産家だつた前夫後藤の歪んだ顔と、最後の台詞が忘れられない。

「血縁は無いわ、金は無いわ、妊娠したからと結婚して

やれば何だ、死産だとお。出ていけ、金はくれてやる。慰謝料はこっちが請求したいくらいだがなあ！」

「文子、何だ、ブーツとして」

叔父の声が続いて耳に入った。

「あ。ごめん。なに？」

「少し辛い想いをさせるかもしれないが、いいか？ 近所の人からも好奇の目で見られるし、警察の反発もくる。しかしこの方法しかないんだ。お前の無罪を信じていればこそ、一つの賭けだ」

「いいわよ、私も警察で尋問されて、腹をくくってるから」

遺産云々の問題ではないと思った。何がいま自分の周りで起こっているのか。それを正確につかみたい。殺人犯という嫌疑も、そこから晴れていくような気がした。弁護士が遺言の執行を受託していると、塩野の死亡をどうやって確知するかを二人で考えてみた。普通なら遺族が通知するだろうが、私の場合弁護士が誰だかを知らされていない。親戚も不明で死亡を通知できないのだから、塩野が親戚にだけ話していたとしても、そこから情報の情報もまた届かないことになる。第一、塩野との

結婚では、式も披露宴もしていない。「両家の紹介」の場すら設けていない。さらに婚姻届の塩野側の保証人が親戚だということも聞いてはいない。心の中では常に塩野の親戚を意識しながら、現実には一人として会ったことがないのだ。誰も信じないだろうが、事実だ。

これらの確認が済んだ後で、叔父はこう提案してきた。ここら辺りの地域では訃報は地元紙に載せる。だからきつと、訃報担当と弁護士との間にパイプをつくってあるのだ。そこで先ず、叔父が新聞社に行き、一般記事担当者のところで事情を訴える。

階段で起こった単なる事故死を警察に疑われ、さらに解剖のためと称して遺体を取り上げられている。このままでは訃報も出せず葬式もできず、故人も浮かばれないと。もちろん塩野の死亡年月日も、私の名もきちんと告げる。訴えの内容は素人丸出しで愚にもつかないが、塩野卓郎が死亡した事実が伝わる。

もう一つ、この計画には、たとえ実際に記事にならなくても、新聞社内では話題になりさえすればよいという利点がある。

警察は、私を逮捕できずにいる。司法解剖中とは言う

が、結局決め手に欠けるだろう。目的は、どこの誰だか分らない弁護士に、塩野の死亡を知らせることあると。奏功すれば、あらゆる動きは弁護士から始まると、叔父は胸を張った。

私は小さく何度もうなずいて、同意をした。

翌日新聞社に行った叔父が戻ってきたのは正午ごろだった。

「お疲れさま」

「おい、刑事に捕まった」と靴を脱ぐやいなや叔父が興奮気味に言った。

「また任意で連行？」

「バカア、俺は容疑者じゃないぞ、残念ながら」と言いながら、それでも半ば笑っている。

「裁判所の人定尋問みたいなものさ。あんた誰で何みたいな。刑事の車で例のコンビニに寄ってな、名刺渡して、俺の免許証のコピーを官費で取らして、早朝の出来事を話して終わりだ」

「さすがマサルさん、堂々たるものね」

「ま、取調室で警部補に啖呵きったお前には負けるけど

な、とりあえずいつでも出頭しますよと、胸だけは張ってきた」

ダイニングの椅子に腰掛け、ネクタイを緩める叔父に、恐る恐る成果を聞いた。

「警察の発表でないと現在進行形の刑事事件に関する記事は載せられないということで、記事は駄目だった。でもまあ、地方新聞のことだ、社内の噂にはなるだろう、想定内だ」

「でも確実性は落ちる…」

「ああ、だから別の手を打った。通夜・告別式未定の、塩野が死亡したという事実だけの、訃報を載せてもらうことにした。もちろん有料だ。訃報には載せないが、検視のために葬儀が遅れていることは、訃報の担当者にも告げているからそのつもりで。喪主はお前、葬儀委員長は俺の名にした。いいだろ、それで」

「ありがと」

「俺は見ての通り男だけど、今回だけは頼れ、お前の長年の主義を曲げてもだ。夫婦のどっちも天涯孤独同然なんて、ドラマだけでたくさんだ」

私は素直に頭を下げた。

正直なところ心細くて仕方がなかった。

「そうそう俺、すぐ帰ることになった」

「え？ 頼れって話のあとで、ひどいわね」

少し動悸が激しくなった。

「最初から三日間と会社に届けて、こっちに来た。到着日が有給休暇初日だから、今日はもう三日目ということになる」

姪の夫の葬儀では弔休暇の対象にならないという。急に身繕いを始めた叔父。

「お昼ご飯は？ 出前、取ろうか」

「いや、駅で立ち食いソバでも食うさ」

塩野の訃報が新聞に載るのが明朝。どこからの反応でも、誰からの連絡でも、あつたら必ず報せると念を押して叔父は、玄関のドアを押した。

急に入ってきた風は、心なしか冷たかった。たしかに部屋の中の明るさは、ひとしきり増しはしたのだが。

午後三時。反応は直接に、チャイムを連打する形であつてきた。

「警察です、開けてください」

任意だったが同行に応じた。検視の結果が出たのかも

しれない。訃報の掲載は明朝だが、叔父の言う通り新聞社の誰かが塩野の弁護士に知らせたとしたら、弁護士から警察への照会は当然考えられる。

「検視の結果あ？ また容疑者からの質問ですか、年配の女性はいいですね、天真爛漫で」

前回と同じ人なので尋問している刑事の名前を、座るやいなや聞いておいた。呼びかけるのに不便だと言いつて。

その大島警部補が笑った。

「警察にとつては秘匿情報かも知れませんが、私にとつては夫に関する個人情報です。知らせていただく権利があるとします」

「日村勝さんのご指導ですか。叔父さんでしたか、あなたが五十五で、彼が六十、あなたの親と彼が兄弟だとすると、かなりくっつき過ぎですね」

父は長男、叔父は二十年近くも離れて生まれたと聞いている。間に三人生まれているが、不幸にして全員が早死にをしたらしい。

「警察で戸籍を変えてくださってもけっこうですけど」

と皮肉で返した。

警部補は真顔に「戻って言った。」

「司法解剖はね、誰でもどこでもやれるものじゃない。遠方に搬送したばかりでまだ完了していません」

「そうですか。じゃあ、なぜまた任意で」

「逮捕状はまだとっていません。前回宣言されているので、来てもらえないと思っていました。なぜ応じてくれたんですか」

「何か塩野に関する新しい情報が、警察の方にかけているのかと」

「ほう、たとえば」

「部屋中探しましたが、夫が結婚生活をしてきた証が、記録とか痕跡とか、何も見つからないんです。パソコンの中は叔父に調べてもらいました。削除して言うんですか、それが、始めからパソコンにはデータを入れなかったか、どっちかだと言っていました」

「家探しの成果としての散らかしは昨日うちの者が拝見しています。普通、一家の主が死ねば、遺産や生命保険、遺言書の有る無しなんか、確かめないといけませんからね、当然だと思いますよ」

穏やかな物言いだ、目が獲物を狙う獣のように光っている。

「で、警察に照会してきそうな所、または人、教えてもらえませんか。分ければ警察の方で素早く対応できますよ」

訃報の掲載を止められたら手がかりが無くなる、いや、むしろ警察が事件の解明のために協力するかもと、一瞬迷った。

「どこの誰だか分かりませんが、塩野が、全幅の信頼をよせて任せたのは弁護士です。たぶん遺言の執行も含む死後の処理の全てをその人に。これは叔父の推理ですが、ここまで何も出てこないとそれしか考えられません」

「なるほどあなたは、いま話してくれたその限度では、ご主人の信頼を得ていなかった」

確かに、と思った。経済的に分離していたとはいえず、これでは私の人間性や、人格自体まで疑っていたことになる。

「どこの誰とも分らない弁護士ねえ」

警部補は掌で口を覆って天井を見上げた。

「明日訃報が新聞に載ります。通夜、告別式未定という



形ですが」

「ほう、この段階で思い切りましたね」

「塩野の死亡が確定した段階で、その弁護士に連絡がいくはずです。嘘の訃報を新聞に掲載する人はまずいませんから。これも叔父の推理です」

新聞社内に弁護士へのパイプがあるはずという叔父の推理は言わなかった。

「生命保険に入っていたとしたら、それもその弁護士が把握しています、きつと」

「それも日村さん？」

「ええ」

「凄い推理力ですね、さすが法学部出だ」

「もう叔父の会社に照会を？」

「一応まあ、警察ですから」

そういえば叔父は、名刺を渡したと言っていた。

貴重な人材扱いはされていても定年の歳だ。叔父に不利益が及ばなければいいのだがと、不安になった。

「とにかく弁護士からでもどこからでも、その訃報の反応があったらここに連絡してください。それがあなたのためになるかもしれないんだから」

警察の手詰まり感が伝わってきた。

思惑は見え見えだったが、思い切つて聞いてみた。

「弁護士が出てきて私や叔父の言ったとおりだとしたら、私が殺したつていう容疑とか、殺す動機だとか、薄くなるつて意味ですか、それ」

これには警部補が目を丸くして言った。

「そこまで言いますか、普通」

刑事二人が同時に笑い出した。

解放されてコーポラスに着いたのは、そろそろ夕日が西の山の向こうに隠れる頃だった。

駐車場の中の赤い軽自動車から、派手な格好の若い女が出てきた。

もしかしたら早川泉とは思ったが、精神的に疲れていたので、無視をして背中を向けた。「ちよつと待ちなさいよ、人殺しイ」

血が足先から頭へと一気に昇つて来るのが分かった。理屈抜きで気に入らない。

近づいてくる女をあらためて凝視した。谷間を強調した胸。下着きりぎりのミニスカート。これ見よがしのス

パンコール。

「じゃあんたは何。インバイ？」と、文字通り背伸びをして、汚い言葉を返した。

身長が十センチは違う大女だった。

「見たのよ、あんたが塩野さんを突き落とすところ。ここから！ 何が事故よ、白々しい」

「見えるわけではないでしょ、ここからなんて」

怒りに任せて組み付いた私。

「離せよ、あたしまで殺す気かき。ほら見ろって、自分の目で」

女とは思えないような桁外れの力で、首根っこを押さえられ、三階から二階へと下る階段の方を向かされた。

手前に転落防止のコンクリートの壁があるが、三階の床からステップ三段目までは確かに見える。

「事件は見える階段の一メートル半ぐらい上で起きてるのよ、充分見えるでしょうが」

挑んだ力が抜けていくのが分かった。

「見たから飛んで行ったのよ。塩野さんはいつだって温かくって、優しくかった。人を小馬鹿にして挨拶も返さないあんたとは違ってねえ。それを突き落すなんて」

「手を出して助けようとしたのよ」

「嘘つけ。だったらなぜ救急車呼ばなかったの。私が駆けてって、早く早くって言ったのに。バカみたいに塩野さんの肩掴んで、何度も何度も揺すってエ」

「気が動転してたのよ！」

「首をやられてる人は揺すらないって、常識じゃないの、バカ。あれが殺人じゃなくて何だって言うの」

「助けたくて何が何だか……」

悔しいけれど、この女の言う通りだと思った。女に体を添わせるようにしてスーツと、膝から落ちた。

小さな石が膝に当たって痛かった。

あの時私は、塩野を本当に助けようとしていたのか。運ばれていく塩野を見て、彼の死を心から悲しんだのか。涙一つ流さなかったことを自分に説明できるのか。この三日間叔父と必死になってやってきたことが、自分の欲得が動機でなかったと言い切れるのか。その全てについて、自信がない。女の攻撃を受けて、ようやく疑いだした自分の心の裏側。

「それみなさい、だから警察に行って、告発してやったんだ、被害者じゃなくてもできるって警察に教えてもら

つてねえ」

それで警察は最初から容疑者扱いだったのか。この女のせいだ。

しかしその憤怒も、いったん生まれた自分への猜疑を封じ込めはしなかった。

「塩野さんはねえ、重い荷物も持ってくれたわ…車のキーを失くした時も一緒に探してくれました…この広い駐車場も狭いあたしの車の中も…わかる？ みんな汚いものでも見るようにあたしを…塩野さんは違ってた…」

長い間女が塩野と自分とのふれあいについてぼそぼそと語っていた。遠い声としてただ耳だけで捉えていた私。

我に返ると、いつの間にか女の掌が私の頭を押さえつけていた。

自分の中で萎縮していたものが、瞬時にして膨らんで弾けた。

「冗談じゃないわよ、あなたなんかには、何が分かるって…」

女の手を払いのけて立ち上がるのと、涙が噴き出るの

とが同時だった。

睨むように間近で見上げたとき、女の両の瞳が濡れていると感じたのは、自分が流した涙のせいなのか、どうか。

翌朝、叔父が手配した訃報が出ている新聞を、くだんのコンビニで買った。

相変わらず刑事が、隠れもせずに尾行を続けている。きつと若い女との攻防も見えていたに違いない。何となく可笑しくなつて、戻るときに手を振ってみた。感情の起伏を自分でコントロールできないでいる。

午前中は何事もなく、私は、散らかした部屋を元通りにする作業に専念した。何でもい。体を動かして良かった。

理容室は閉じたままだった。気にはなっていたが、駅二つ離れたところにある店までの往復に時間を割くわけにはいかなかった。いつ訃報の反応が来るかわからないからだ。

午後一時。インスタントのソバで昼食を済ましたそのときに、電話が入った。

「突然に、且つお電話で失礼します。東京の心の森法律事務所の方保玲児と申します。ご主人の塩野さんとは大学で同じゼミでした。亡くなられたと聞き、検視中とも聞きましたので本日地元警察にも確認の電話を入れしました。つきましては遺言の執行等につきお話をしたいと思っております…」

見たではなく聞いた、という。今日の訃報を見たのではない。とすれば、叔父の推測通り、新聞社と弁護士との間にパイプがあったのだ。私は小さな興奮に包まれた。できれば叔父と一緒にと事情を話したのだが、弁護士も多忙らしく「とりあえずのご説明を」と、譲らなかった。

日時は明日の午前十時、場所は二十キロほど先にある慈徳院の本堂。何とお寺だった。

「異例ですが、所轄署の要請により刑事二名が同席します。ご存じのように警察は民事不介入です。遺産の内容そのものよりも、むしろ奥さんが内容を把握していたかどうかを確認したいようです。ちなみにこのことは告げたいと言われています」

受話器を置いた後、証人として早川泉がいるのに、ま

た司法解剖に出しているのに、なぜ逮捕しないのかを考えてみた。もちろん私は殺してなどいない。事故と犯行の区別が困難。証言に今一つ信頼性が無い。確たる動機が掴めない。この三つだと思うが、本当に何も知らないし、犯してもいないという事実は、捜査担当者にも何かを伝えているはずだ。

早川泉はたぶん泣いていた。塩野の死を心から悼んでいた。塩野の風采と性格、四十近くはあるだろう年齢差からいって男と女の関係は想像しにくい。つぎはぎだらけの吹きから想像できる塩野の優しい行為の数々。もしかしたらあの女は塩野の中に、男親を見ていたのかも少しれない。

「哀しい女だな、お前は」

叔父の言葉が突然想いに重なってきた。

その叔父に早速明日の話を伝えた。  
「連絡を受けてすぐお前に遺言書を見せられるとなると、検認手続きが不要だつてことだ。公正証書遺言だな、それ。血族相続人はゼロか、代襲相続人も含めて一人か二人つてどこか。とにかく終わったらすぐ電話をくれ」  
パズルでも解いているつもりなのか、叔父の声は心な

しか弾んでいた。

駅の近くだったが坂が急で、毎日が寝不足の私には堪えた。石の門柱は小さく、石畳は真ん中を除けば苔むしていた。変な言い方になるが、決して流行っているお寺ではない。車は付近に見当たらない。きつと全員が鉄道と徒歩で辿りつくのだろう。それにしてもなぜここで、とあらためて訝った。

「ここが私の実家なものですから」

のっけから久保弁護士言葉で疑問は解けた。

同席した刑事は最初に部屋に来た二人だった。

「それと、司法解剖なども片付き、関係者の方全員が揃ったところで、正式な開示をと考えています。捜査機関からの事情聴取に応じたという意味合いもございませぬ。一法曹という立場と故人の友人という立場を併せ持っている私、という事情もあり、とりあえず今日いらした方がお困りにならないよう、概要をお伝えします。刑事さんの方で捜査資料としておっしゃるなら、後ほど関係書類をお見せしますので、メモなどしてください。あくまでも本日は正式な遺言書の開示ではございませぬ。

もつとも奥さんがどうしても見せろということなら従うしかありません。法定相続人は文子さんお一人です。ただ刑事事件絡みで、今申し上げた形が一番よろしいかと愚考する次第です」

弁護士は塩野と同年齢とは思えないほど若く、凛々しくさえみえた。

ゆつたりとした所作で、何やら封書を開いている。遺言書らしい。

「あの、塩野は法学部だったのですか、同じゼミと電話でおっしゃいましたが」

「え、ええ。塩野さんは卒業後地方公務員として五十五歳まで勤めていましたから、道は違っていましたか」

「そうでしたか」

「なるほど、それすらご存じない」

「すみませぬ」

刑事が揃って小さく笑った。

「なるほど」の意味は大きい。塩野が生前彼に、私との夫婦関係について相談していたに違いない。もちろん不満という形で。

「これは友人の立場で伺います。なぜ再婚の相手に塩野

さんを選んだのですか。もちろん彼も再婚ですが」

とくに嫌な質問だとは思わなかった。自分でも折に触れて「なぜ」と自身に問いかけてきたことだ。そしていつも同じ答えで締めくくっていた。

「求められたから、です」

「ほう、見事に符号しますね」

「塩野にも聞いたことがあるんですか」

「ええ。答えは、僕が求めたから」

…それだけの間柄だったのかも。

刑事が、今度は顔を見合わせている。

「塩野さんの先妻は、彼をつまらない男だと罵って出ていったそうです。後日署名捺印済みの離婚届が郵送されてきた。二人の間に子供は無かったし、彼の両親や兄弟は台風で一度に亡くなっているんです。兄弟にも子供はいません。だから先行きの生活に困らないようにと、彼は質素倹約に努めた。妻に対する責任であるかのように錯覚して、です。先妻はそれをケチと受け取って家を出て離婚。それからしばらくして後藤文子さんに出会った。つまり、死産で子供を亡くし、資産家の夫から無慈悲に叩き出されたあなたに」

涙腺がおかしい。目が潤んできた。

「塩野さんは思ったそうです。この人を温めてあげよう。この人に尽くしてあげよう。それが自分自身を癒すことに通じると」

ところが私は塩野が示す温かさ、優しさをことごとく突き返した。男の身勝手さ、男の残酷さに懲りていた私は、夫婦間に何があっても自立できる自分を創り出そうとしていた。

久保弁護士が話をやめて、じっと私を見ているのに気づいた。まるで私が、話の続きを心の中でしているのを見透かしてでもいるように。

「あらためまして、私が遺言執行者を務めます弁護士久保玲児です。塩野さんの遺言書は相当長いもので、公正証書遺言です。」

穏やかな顔つきで急に本題に入った弁護士。

「もちろん私も公証人役場に赴き、友人として立会人の一人になっていきます。ご存じのように遺言は死ぬまで書き換えが可能で、塩野さんの最新の公正証書遺言はひと月前のものになります」

『ひと月前…』を、反芻した。なぜか動悸が激しくなっ

た。

「まず肝心なことを捜査陣に申しましよう。これからお伝えする内容について、塩野さんは容疑者にされている文子さんに全く伝えていません。預貯金の額、土地建物所有の事実、その評価額、所有する有価証券類の取得時の価額、生命保険契約の内容など、飾らずに申し上げれば、塩野さんの遺産目当という犯罪動機につながりそうな情報は、彼と私と公証人及びもう一人の証人しか知らないのです。もちろんこの遺言書の存在もです」

「ありがとうございます。それでも一応」

中年の刑事が背を丸めるようにして言った。

「分かっていきます。あとでお見せします、守秘義務は当然守ってくださいるでしょうから。なお法定相続人たる文子さんですが、今の段階でお見せすることはしません。理由は先ほど申し上げた通りです」

私はいまさらながら気がついた。塩野に何も知らされていないのではなく、塩野に何も聞かなかったのだ、共同生活者なのに。人生の最後の部分を伴にするはずの夫婦なのに。

「この遺言書によれば、文子さんに対する遺産の分配は

ゼロです。さきほど申し上げた遺産の全ては、親族ではない一人の女性に包括遺贈されます」

一人の女性、という言葉が体を揺すった。

「生命保険金ですが、通常生命保険会社は第二者を受取人とする生命保険契約は締結しませんので、つまり配偶者、直系血族、婚約者などに限定されるのが通常ですので、これは約定通り配偶者の文子さんに渡ります。ただ、保険受取人が被保険者を殺害した場合は当然支払われません。文子さんは容疑が晴れるのを待っていてください」

夫を殺したかもしれない女に、遺産を全部受け取れるという女性の情報を渡せるわけがない。危険すぎるからだ。保険金額についても伏せるだろうと予測した。

「また、今の段階で、各遺産の価額や生命保険金額、包括受遺者の氏名などをお伝えすることはしません。これは警察の方にもご了解いただけると思います。文子さんに限って申し上げれば、容疑が晴れて、つまり相続人欠缺事由が確実に無くなってから開示をします」

「今のお話、調書でもご協力いただけますか」

中年の刑事の方がくちばしを容れた。

「もちろん」と弁護士がうなずく。

「疑いが晴れても私は、遺産についてはゼロですから、それで結構です。その女性の方を恨んだりするのもいやですし」

声が少し震えた。鼓動も激しい。

全身が惨めさで満たされた。夫の遺産が全て見も知らぬ女に贈られる。どうせ大したものではないだろう。それでも、身から出た錆なのかもしれないが、辛かった。

「遺言執行者としてその折にすべてを明かしますし、遺言書もお見せします。付言しますとこれは、容疑が晴れて遺留分減殺請求権を行使する段階で役に立つ情報です。それが何のことかは叔父さんの日村勝さんにどうぞ」

「叔父のことも知っているんですか」  
「ええ、塩野さんに話は聞いています。じゃ、文子さんはここまでということでは」

立ち上がるのもスローになった。

遺産がどうのこうのも当然あるが、自分のバカさ加減と勘違いの十年間が悔やまれた。

「塩野文子さん」

本堂を出る直前で弁護士に呼び止められた。

「私は、あなたが人殺しとは思えない。私が今日の本題に入る前の話で、あなたは涙した。あれで塩野は向こうの世界で言っていると思います、久保 文子は犯人じゃないよって」

私は深々と頭を下げるしかなかった。喉が詰まって、言葉が出なかったのだ。

フルネームで呼んでくれた意味。それも嬉しかった。

三日後、司法解剖の結果が出た。直接の死因は頸椎骨折で呼吸機能が停止したことだという。当初の警察の検視結果と同様だった。ではなぜ司法解剖に回したのか。転落の原因として事前に薬物その他の服用、投与が無かったかという議論が、あつたらしい。早川泉の告発も動機の一つだったというが、署内の意見は二分していたという。ただ解剖の成果として、咽喉にポリープがあり、肝臓にもかなり進行している癌があつたことが判明している。

ともあれ、私の容疑は解けた。

法定相続人が私一人ということもあって、久保弁護士は、「もう一度寺でいかがでしょう」と連絡してきた。



塩野の遺言の全てを開示するというのだ。

私は快諾した。

『これで遺産のすべてを贈られるという女のことが分かる』

容疑者という屈辱に勝るとも劣らないものがあつた。私は心身の状態が快復するに従つて、その女へのこだわりが強くなつていた。

叔父に弁護士と会う日を知らされたが、返事は「一人で聞いて来い」だつた。「お前の見苦しい姿を見たくない」と憎まれ口をきくことも忘れていない。叔父のことだ、また何か考へてのことに違いない。

久保弁護士は文机を挟み私と向かい合う形で座つた。

塩野の遺言書を封書から取り出すと、落ち着いた所作で広げ、私が見やすいように、くるりと向きを変えた。

どうせ自分のところへ来ない遺産の数字は、見ても大雑把にしかとらえなかつた。一番高額になるはずの土地は所在、地番、地目、地積だけ。価額の記載はなかつた。

市街地の宅地で八十二平方メートル。建物は木造二階建、

延床面積五十三平方メートル。

「その土地建物は塩野が、あ、今日はあなたと私だけなので、彼の親友として呼び捨てでよろしいでしょうかね」

「はい、どうぞ」

目つきを穏やかにする間がなかつた。

「前は警察の人がいましたものね」で、やつと笑みを創つた。

「それは塩野が亡くなつた両親から相続したものです。地元の不動産屋で鑑定してもらつた結果で正式なものではありませんが、土地付き建物として三千七百万程度だそうです。建物がかえつて邪魔をしている格好ですかね。ときおり注釈を入れます」

「あの、邪魔と、いいますと？」

「古い建物ですから、取り壊す費用を土地の本来の評価額から引いて考えるんです。どうぞこれからもご質問を」

「ぜひお願いします。何も知りませんので。いえ、塩野に何も聞きませんでしたので」

弁護士が微笑を返してきた。

「有価証券取得時総額二千五百万円」

音読することで解説を促すことにした。端数はもちろん

ん省いて。

「塩野が退職金の大部分を株券にかえています。ちなみに遺言書作成時の時価総額は二千八百三十万でした。時価は変動するので取得時の数字にしてあります」

「預貯金は通帳三冊、各口座の番号が記されている。これは視線を送るだけにした。」

「作成時の預貯金総額は七百十万円でした。これも日常的に変動しますから、口座の特定だけにしました。ちなみにマイナスの遺産はありません、負債はゼロです。クレジットカードも持っていません」

このあと細々としたものがあつたが、気持ち、が混乱してきて何一つ頭に刻み込むことができなくなつた。

『こんなに遺産があるのに、これが全部見ず知らずの女に』と、感情が徐々に激していったのだ。

ハッと我に返ると、目の前に涼やかな弁護士顔があつた。

『人のことだものね、弁護士も結局』

恨み言を言い募りそう、体を意識的に固くした。

「生命保険金は死亡時、一千万になっています」と弁護士は、いつの間にか用意をしていた保険証書を私に手渡

した。

「保険金受取人として記載されているのは文子さん、あなたです。続き柄は妻」

時間を止めてしまいそうな沈黙があつた。

『遺産の七分の一以下のお金…』

塩野の親友の弁護士がじつと私を見つめている。

取り乱すまい。叔父が見たくないと言っていた情けない姿にはなるまい。現実に数字を知つてしまう恐ろしさ。

「その女」に掴みかかりたい衝動が体を激しく震わせた。弁護士が前回答疑者だつた私に、詳細を告げなかつた理由が実感として解かつた。

「この契約日二年と少し前つてことですよね」

自分の感情を逸らさなければと声に出した。このままでは弾けてしまうと思つた。

「ええ。十年の満期が来てからの、新しい契約になりますね」

「その前の保険金額つてご存知ですか」

何のために口にしていいのか。自分でも分らない。こつとばが勝手に飛び出ている。

「ほう。いいでしょ、申し上げましょう。一億円です」

「受取人は誰でしたか」

「塩野本人でした。前の契約が疾病も絡んでいたせいもあるでしょうが。彼が亡くなった場合は条項に従い法定相続人、つまり文子さんが受取人になる内容でした」

「なぜ保険金額が十分の一になり、受取人が塩野自身ではなくて私になったのか、分かりますか、教えてください。先生は塩野の法律問題の全部に関係してらしたんでしょ」

弁護士がなぜか腕組みをした。

「文子さん、執行者の義務である包括受遺者のことをまだ申し上げていないんですけど」

「ですから！ その女なんですよ、新保険のことも今度のことも全部、原因があ」

ついに決壊したと、そう感じた。

「抹茶を点でて差し上げましょう、ここはこのままでどうぞ」

弁護士はすつと立つと、振り返りもせず、寺の奥へと歩き出した。まるで私が必ず追ってくると確信でもしているかのように。

やや黄ばんだ掛け軸、くすんだ土壁、焼けた畳表と、寺の外観だけではなく、茶室もまた古かった。ただ、やや薄暗い室内の中でひとり茶釜の黒だけが輝いていて、確かに落ち着く空間ではあった。

「先生、作法を知らないんです」

すぐにお茶が出てくるといったものではなかった。弁護士は何と、焚き付けを使い薪に火を点けるところから始めたのだ。法律事務所が暇なのか、たまたま今日が非番の日なのかは知らないが、まったく急いだり慌てたりしない人なのだ、感心をした。

おかげで少しは落ち着きを取り戻してきた。

「おいしそうに茶を飲む。それだけでいい。それが究極の作法だと父に習いました」

それなら出来そうだと、肩の力を抜いた。

「少し煙いかもしれませんが、火の面倒を見てやってください。すぐ戻ります」

人に用事を言いつけて、自分は平気で中休みをとるのかと半ばあきれたが、何となく憎めないところがあって、クスツと笑ってしまった。

「あ。包括受遺者の女性ですが、七十五歳です。それで

「はちよつと失礼」

「そう言うと、一呼吸おいてからゆつくりと襖を閉めた。色恋の線は消えた。」

「それが私を冷静にさせると考え、前もって伝えたのかもしれない。法律をやる人は情感に乏しいのかと思っていたが、塩野の、久保という友人は一味違うのか。」

「塩野と老婦人との関係は、いったい何なのか。七千万近い財産を贈って逝つたと同じことになるのだから。」

『弁護士からとことん事情を聞いたうえで、本人に会う』と心に決めた。

「いい具合に点きましたね、火」と弁護士が戻るやいなや言った。

「ずっと火にこだわっているのは、私の中の怒りの炎を意識してなのか。まさかとは思うが。」

「書類を広げればなしでしたので」

「先生。七十五歳の女性と塩野は何の縁で、いつごろからの関係のですか。いえ、当然男と女の関係だとは思っていませんが」

「すこし慌てた。嫉妬ととられては心外だ。」

「出会いといえますか、それなら聞きました。この遺言

の内容は正直なところ真偽のほどが疑われますから。公正証書遺言でなかったら、確実に相続人から無効確認の訴えを起こされるでしょうね」

「私も起こせるんですか」

「それは日村さんに聞いてください。私は塩野の代理人で、執行者ですから」

「弁護士の表情が心なしか曇った。」

「叔父に遺産の半分は取り戻せると聞いている。塩野のために何もしてこなかった私としては、その半分と保険金だけでも「棚ぼた」だと言える。欲張って惨めな想いをしたくはない。いまは女の意地として何が塩野に起こっていたのかを知りたいのだ。その気持ちの方が大きい。」

「それで、出会いというのは」

「そうでした。かなり前からボランティア活動をしていましたね、彼。地元分譲別荘地の中の彩花というケアハウスに行つたときに知り合つたと言っていました。車椅子の貴婦人と表現していました。名前は牧野沙代さん」

「身障者の方？」

「そのようですね、重症ではありませんが、単独歩行は困難とか」

「先生も会っていらっしやらない」

「ええ。受けるについて何かをしなければならぬという負担の遺贈にするなら予め本人の承諾が必要、というか、私なら必ず承諾をとるでしょうが、塩野は何も負担を付けていませんから」

「ということは……と弁護士を凝視した。」

「はい。お察しの通りです。相続人と同じ地位を得たということですよ。牧野さんはこの包括遺贈を受ける義務はありません。またご自分が受遺者になっていることすら知らないと思います」

「これから先生がお知らせに」

「ええ。この後で出かけます。本来ならいまここに居てほしいところですが、こちらから訪問してと、了解を取りました。特殊事情で同時に開示できませんでしたが、少なくとも同じ日にお知らせすべきでしょうからね」

前回呼ばなかったのも、やはり彼女に恐怖心を起こさせないためだったのだ。なにしろ私は殺人の容疑者だったのだから。いま聞いた限りでは、彼女は何も知らず、何の罪もない老女に過ぎない。

今まで腹中で何度も罵ったことを、少し恥じた。

茶釜が湯気を立て始めた。

弁護士が抹茶を茶碗に入れ始めた。よく見ると抹茶がいくらか量の上にこぼれている。下手なのだ。

見ていて初めて気がついた。長い時間、二人きりで、自然な形で話ができる環境を、目の前にいる無器用な弁護士は創ってくれたのだと。

「塩野がその彼女に遺産を渡そうとした動機みたいなもの、ご存知ですか」

怖くもあるが知りたかった。

「二通りに分けて亡き塩野の心の中を探索することになりますよね。なぜ妻である文子さんではいけなかったのかの一つ。なぜ縁の薄い牧野さんを選んだのかもう一つ。どちらも謎ですよ。もつとも二年半前でしたか、塩野は牧野さんの養子になったことがありますが、冗談だったのかもしれないが、よほどの女性なのでしょうね」

分類はそのとおりでだが、謎だというのは嘘だと思った。自分で塩野の親友と言いつつ切ったのだ。土地建物もわざわざ地元まで出向いて不動産屋に時価を聞いている。この弁護士が動機を謎にしたままで、全面的に協力をするわ

けがない。そう思った。

「一ついいですか。文子さんは会話をしているときに、夫は、主人はとか、うちの人はとか口にしませんよね。この仕事をしていると大勢の奥さん、未亡人に接しますが、だいたい配偶者を表すのに苗字をそのまま使っていません。ところが文子さんは塩野と、ほとんどそれ一本で通しています。なぜでしょうね」

確かに、それは自覚していた。意識的にそうしていたと言ってもいい。

「塩野は結婚してからずっと文子、文子でした。私にはこのことが、二人の十年間の夫婦関係を、象徴しているように思えます」

鋭い指摘だった。心がうなだれ始めるほどに。

「彼は情の深い、真面目の上にクソが付くほどの男です。あなたがどんなに素っ気なくしても、前婚で傷ついたあなたを癒すことばかりを考えていました。それが自分自身を癒すことでもあつたんですが。どうやら最期まで叶わなかったようです」

「そうおっしゃいますが、先生」

準備もせずに口を開いてしまった私。

「わたしは塩野に一度も頼つたり迷惑を掛けたりしていません。理容室で自活して生活費も自分の分を負担し、病気もケガもせず、親戚も叔父一人ぐらいですから気遣いもさせていません。面倒な相談だつてしたことなんか無いんです」

弁護士が小さく肩を落とした。

「抱えた面倒を出し合い、迷惑をかけあい、それを二人の協力で解決していくのが夫婦だ、という気がしますが、理容室をおやりになるときも、相談は塩野にはなく、日村さんにした」

「夫婦つて言つたつて、いつ終わるか、いつ叩き出されるか分らないんです」

「失礼ですが、寢床はどうしてました」

「別です。部屋も、です。普通でしょ、歳をとつたら」

「最初からだ、聞いていますが」

「塩野から？」

「ええ」

そんなことまで相談していたのか。やはりこの弁護士は何から何まで知っている。そう思った。

「彼は結婚して一年ぐらい経つたときに、自分が消極的

だから夫婦になれないのだと、言わば反省をしてあなたを求めたそうです」

あの時だと、すぐに分かった。

「あなたの心の傷が癒えるまでとの配慮もあったようですが、とにかくその日、塩野はキスをしたんですが、あなたに抵抗されてそれ以上には進まず自分の床に戻った……」

湯を注ぐ音がなぜか大きく響いた。

「彼は見てしまったんです。薄暗いキッチンでああなたがキスの直後に念入りに口をすすいでいるのを」

たった一度だけの塩野との接触だった。ただの同居人の関係が確定した日でもあった。

「どうぞ」と茶碗を差し出した弁護士。

「それが遺産を渡さない理由、ですか」

「さあ、私には到底理解できない領域です。ただこれだけはお伝えしたいですね。彼はその後ずっと悔いていました。急いだ自分が悪かったと言ってます」

「それはない。先生それは嘘です」

急に喉が詰まった。

「じゃあ、いま頬を伝っているものは何です」

「憎んでたはずです。塩野が後悔していたのはわたしとの結婚です。だから……」

なぜ涙が出るのか、自分でも分らなかった。

結局、斎場を借りての通夜や告別式はやらなかった。塩野に親戚がなく、自分の方も叔父だけだったからだ。地域社会での繋がりといってもほんのわずかに過ぎない。許可証を取り、火葬場に行き、私、叔父、久保弁護士の三人で寂しく送った後で、塩野が使っていた部屋にお骨を置いた。遺影、花、線香などはきちんと設置している。せめて焼香をと訪れる人がいるかもしれないので。塩野のボランティア仲間の数人が来てくれたが、それからは叔父と二人だけの空間になった。線香の煙が真っ直ぐに上っている。

「久保って弁護士なあ」

「え？」と我に返った。それまでの私は意識を失っていたのか、ただの居眠りなのか。

「面白いやつだな。法律を使いながら人の心の中に踏み込んで来やがる。しかもそうされてる方に不愉快さが生まれなく」

「お坊さんの息子だからじゃないかしら」

「なるほど。塩野が俺に嫉妬していたという理屈には驚いた。確かにお前が頼った男は俺だけだ」

「一度だけよ、それだって。理容室のとき」

「奴はこの十年の間ずっと俺にと、そう感じてたのさ。そのせいで文子は自分に頼ってこないんだってな」

「まさか、そんなちっぽけな。男のくせに」

「ばか、男だからだ。分らん女だな、お前は」

「どうせですよ」

何度も同じようなことを言われた。前夫の後藤は事あるごとに、私の顔に唾をまき散らしながら馬鹿だと罵つたものだ。

「だから死んでまで俺に知恵比べを仕掛けてきたんだ」

「事故死よ塩野は、偶然。仕掛けるとか」

「待て。いま俺、何て言った」

「だから死んでまで俺に」

叔父が急に掌で私を制した。目が入り口のドアの方をにらんでいる。

「刑事が靴を掴んでどうとか言ってたな、この前、電話で。塩野が転落したときに履いてた靴、返ってきたか」

「うん、いま下駄箱にどっちの靴も」

叔父は草を掻き分けるような格好で、入り口に飛んで行くと、黒い靴を二足引き出して、靴底を見くらべた。

「どれがどつちだか分かるか」

「毎日見てるんだから」と私は、ノソツと立ち上がって「上に小さな網目が入っているのがあの時履いてた方」と言った。

「滑りにくいように靴底に加工がしてある」

「置いてった方は？」

「何の細工もしてない」

「履き替えて用心したのに、滑ったってことか……」  
これが逆だったら、あの中年の刑事はきつと、私への疑いを強めた。

「いや、違う。何か見落としてる」

「マサルさん、もうやめよう、探偵小説じゃあるまいし。」

叔父さんの推理力の凄さはもう十分解かったから  
そのとき居間の方からチャイムが聞こえた。来客だ。

私は手を伸ばしてドアを開けた。

告発をした早川泉が、上から下まで黒一色の姿で立っていた。目を丸くするほど清楚で、綺麗だった。



「お焼香、させていただけますか」

「それより先に何か言うことあるでしょ」

「どうぞ。故人も喜ぶと思います」

叔父が私の後ろ襟を引きながら言った。

確かに感情が先走った感がある。叔父に導かれて奥へ入る女の後姿を見ながら、自分が小さい人間に思えた。塩野のために来たのであって、私のためにはないのだ。拒めるとしたら故人だけだ。

黒いストッキングを履いたふくらはぎから踵へのライン。きれいだ。膝までを隠す遠慮がちなスカート。それでいてヒップラインは見事なまでに映えている。若さとは圧倒的なものだと思つた。

どこで習つたのか、所作は流れるように美しかった。駐車場で感情のままにぶつかり合ったあの女は何だったのだろう。きつと塩野には、こちらの顔を見せていたのだ。そうなら塩野が限りなく優しくしていたというのもうなずける。

「いまご霊前で、塩野さんの奥さまを告発してしまったことをお詫びしました。本当にご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした」

下げた頭を見ていて気づいた。茶髪だったはずだと。

「こちらこそ現場で助けていただいたのに、何のお礼もしませんで。失礼しました」

隣に座っている叔父が、私の背中を突いた。

なぜこういふ言い方しかできないのか。自分で自分が情けなくなつた。

「失礼ですが許していただいて、おいくつですか」

今度は私が叔父の脇腹を突いた。何の関係があるというのか。

「ことしでもう、二十九です」

「ありがとうございます。いえね、この姪から話を聞いて、もしかしたら塩野はあなたを自分の娘になぞらえていたのかなと、そう思ひまして」

三十五のときに生まれた女の子。質問の意味が納得できた。

「わたしも何となくそんな気になっていました。ごめんなさい」と女。

私もつられて深々と頭を下げってしまった。

「では失礼します」

「文子、お送りして」

叔父がいやに偉そうに指図をした。

「いい年をしてマサルさんも男なのね」

戻るやいなや嫌味をぶつけた。

「話に聞くあばずれ風から俄かに淑女風か。ほんとうは出来るなあの子。いま居る世界は訳があつてのことだらう」

「ハイハイ」と応じてから、口を掌で塞いだ。また一回でいいと叱られそうだったから。

声が無いので振り返ると、叔父がジツと塩野の本棚を見ている。

「これ、前からここにあつたのか？ この前は全然気がつかなかつた」

「なに、何のこと」

「単行本だ。タイトルは、自死で自分を生かす」

「知らない。私、本棚の本、興味無いし」

「そうだったな」

「ジシって何？」

「自殺のことだ」

一瞬、私はその場で硬直した。首だけが何かを拒むかのように左右に揺れている。

「もしそうなら、塩野の行為の解釈のほとんどがひっくり返る。文子、お前弁護士から生命保険のこと、聞いたよな」

「う、うん」

「それは死亡時だけのだな。つまり疾病保険も併せたものではなくて」

「新しいのはそう。保険事故は死亡だけ」

「契約日は何年前だ。ちゃんと思い出せ。まだ証書自体は受け取ってないんだろ」

生命保険は時間がかかる受遺者との遺産分割協議の対象ではないが、塩野の死に伴う諸手続きが面倒なので、久保弁護士の厚意に甘えて、預けた格好になっている。

「二年と少し前、確か」

「出る。一年から二年、保険会社や約款によって違うかもしれないが、契約後二年以上経過していれば自殺でも保険金は支払われることが多い。塩野の約款はたぶん二年だと思う」

叔父は何かによかれたように喋りだした。

自殺たとして、なぜ妻と一緒に現場で、なぜあの階段で、あの時刻で、いや、なぜ早川泉が目撃できるように、

そしてなぜ死後のことを極秘裏に、友人の弁護士だけに依頼したのか。とくに階段の転落という手段は、一つ間違えれば死ぬずに、寝たきりや植物人間になる恐れがある。いや、その方が確率としては高いのだ。

「違いわ、事故よー」と私はたまらずに、叔父の口を封じた。

「マサルさん靴よ、靴。死にたいなら滑りやすい方に履き替えるでしょ。塩野は滑らない方を選んでる」

叔父の目が鋭く光った。

「違う。確実に死ぬには、滑らない靴が必要だったんだ」

叔父は妄想をたくましくして自殺説を唱えながら二日滞在して帰っていった。

コーポラスの前からタクシーを使って三キロほど走ったところにある「彩花」は、海を臨む小高い丘の上にある介護施設だ。

幅十メートルはあるうかというゲート脇に管理人棟があり、私はそこで住所氏名と来訪目的を記して、胸につける許可証をもらわなければならなかった。

「あの、こういう手続き、ボランティア活動で来ててもす

るんですよね」

そう聞くと、高齡の守衛が改めて申込票を見て、「あなた塩野卓郎って人の奥さんかね」と私の顔をジッと見た。

「そうですが、塩野の知り合いの方ですか」

小さな地方都市のことだ、ありうる偶然だ。おまけに私は塩野の交友関係など全く興味がなかった。

「いや。ただ塩野さんて人、ここ三年ぐらいかなあ、ひと月に二回は必ず来てたから。その内の一回は五、六人で来るボランティア。あとの一回はいつも同じ人、ここに書いてある牧野さんとの面会が目的欄に書いてあったから、ちよつと印象が強くてね。弁護士の人も来たし、心配ですねえ、奥さんとしては」

年寄りのお喋りや、勘繰りは迷惑だが、この情報は有り難かった。

「中で誰かに聞こうと思ってるんですけど、その人のお部屋」

「無理、探し回るのは無理。五棟もあるし。それに特定の人への面会は、ここで先方の承諾をとることになります」

目の前でダイヤルを回した彼の指が、すぐに丸の形を作つてみせた。

「この広い敷地の真ん中に芝生がきれいな公園があるんです。すみませんが、わたしをつれて行ってくださいな」

「はい。車椅子を押しして、ですね」

外で話そうということらしい。たしかに応接フロアで入居者たちの真只中で話すことではない。部屋の中で二人だけとなると、二容疑者では怖かるう。玄関から出てきて、挨拶を交わしてすぐの決断にしては見事だった。きつと頭もしつかりしている。そう思った。

ほとんど白髪、後ろでワインレッドの布を使つて可愛く束ねている。アポを取っていたわけではないのに、すでに化粧もしていた。淡い色の口紅も似合っているし、銀縁のメガネも品が良かった。ワンピースなのに上下に別れて見える色柄もいいセンスだ。塩野が「車椅子の貴婦人」と評したという弁護士という言葉を出した。

舗装された歩道は車椅子に優しくできていた。沿道も土が露出している所はほとんど無い。日射しを受けた歩

道の白と、芝生の緑が痛いほどに眩しかった。

何から話していいか迷つた。塩野と会つていた時間の中身に触れるのも嫌だったし、のっけから遺産の話も卑しい感じがして。

「女子さん」

下の名前を急に使われて少し驚いた。

「あなたはもしかしたら、誰にも頼らないでこれからの人生を送れると思つていませんか」

とっさに「できれば」と言つたが、そのあとが繋がらなかつた。塩野の事故死以来、その自信がグラついている。

「わたしもそうだったの」

たしかに第一印象としては、気位が高そうに見えた。「足の自由を失うまではね。でもそのお陰で心が自由になつたの。こうしなくちやダメ、こうならなくちやダメ、言つちやダメ、甘えちやダメ、甘く見られちやダメって…辛くても、息苦しくても、寂しくても、憎まれても、それを抑え込んで生きてきたわ。小さいけれど会社も創つた。そういう自分が立派だと思ひ込んでいたの」

「凄いなと思います」

思わず同意をしてしまった。

「それは違うとはつきり言ってくれたのが、塩野さん。あなたの旦那さま。車椅子に乗るようになったらおしまい。もう一人では何もできない。そう思つて落ち込んでいたわたしにね」

押し始めて最初のベンチの横で、止まった。婦人の希望だった。

緩いけれど坂だったので、私もかなり呼吸が激しくなつていた。

「何回目だったでしょうかね、車椅子を押していただいたときです。突然おっしゃったんです。私が言わなければならぬ台詞を。ありがとうございます、と。びつくりしました」

「なぜでしょう、わたしにも…」

夫人は優しく微笑しながらうなずいた。

「ちよどこの道です。なぜお礼をわたしにと申し上げると、僕が押してるからあなたは前に進んでるんですね、僕がこの手を離したら、あなたは後ろに下がりだして危険な目に遭うんですよ。だから、ですって」

「当たり前のことですよ、それ。ほかに」

「いいえ、それだけでした。わたしは次にお会いするまでの間、塩野さんのおっしゃったことの意味をずっと考えたものです」

「教えてもらえますか、結論」

「わたしの手を握ってくださいますか」

言われた通り夫人の手を取った。

「明日になれば、ご自分でお分かりになるはずですから、やめておきましょう。それよりこの先で曲がつて少し行くと、創ったお庭でなくて、自然のままの野原があるんです。一緒に行きましょう」

心の中がもやもやしつつも夫人の希望通りに車椅子を押した。

途中、誰にも制止されなかったのが不思議なくらいだ。着いてみれば少し傷んだ舗装路の両脇に野草が生い茂り、真つ直ぐな道の突き当りは、なんと雲を浮かべた空だった。きつとその先に急傾斜の下り坂があるに違いない。とてものこと、車椅子で来るような場所ではない。

「塩野さんに何度か連れてきていただいたの」

「ここへですか」とため息をついた。

「その花」

「え？」

「なんという花かご存知ですか」と、夫人が指を差した。蔓があり花卉は白。その真ん中付近は紅むらさき。たくさん咲いて初秋の風に、葉っぱと一緒に揺れている。

「ヘクソカズラ。昔塩野に聞きました。屁とか糞とかいかに汚くて、花のくせに臭いので大嫌いです」

「そうですか。でも塩野さんは大好きでしたよ。わたしが早乙女花という別名をお教えしてからは特に愛でてくださいって」

「さおとめばな、ですか」

「文子がかわいそう」

「はい？」

「いえ、塩野さんがそのとき、そうつぶやかれたので」  
私が誰からも忌み嫌われているということか。いまここで口にすることではないだろうにと、少し腹が立った。「さいけふにはいおほとれるくそかずら、たゆることなぐみやづかえせむ」

「何ですか、それ」

「万葉のたかみやのおおきみのお歌です。さいかちとい

う木に絡み、まとい付いているヘクソカズラのように絶えることなくお仕えしましようという歌です。塩野さんは後で調べて、ご自分を早乙女花になぞらえたのかもしれませんね。わたしは読み誤っていたようです。きれいな名前で呼んであげなければ可哀想、見ているこちらしだいと。そう思っていましたから。塩野さんのあなたへの十年は果てのない忍耐だったのでしょいか、それともあくまでも温かい、包み込むような情愛だったのでしょいか」

野原の奥の方のススキが一瞬大きく揺れた。

『忍耐て何よ』

自分の両の手が、意思とは関係なしに車椅子を押しだした。

婦人は黙ったまま任せきっている。頭が左右に揺れているのは拒絶ではない。路面の凹凸がそうさせているだけだ。

『お願い。嫌だと言つて』

車椅子は道の頂点を跨いで停まった。

眼下に小さく、細長い街並が見えた。その彼方には大きな海が光っている。

「ありがとう。塩野さんもこの景色は見せてくれなかったわ」

婦人の横顔がほほ笑んでいる。

心だけではなく、両足も震えた。

『何をしにここまで押して来たんだろう』

長い沈黙が怖かった。

結局、遺贈を承諾したのかどうか、直接に聞くことはできなかった。その場しのぎで嘘を言うかもしれないし、聞いて惨めな想いをするのは私だ。弁護士の話を書けば棚からぼた餅の数千万円、断る人はいない。

現場で車椅子を押しながらそんなことを考えてしまい、気がついたら婦人の部屋の前に着いて、辞去の挨拶をしている私があった。

翌日久保弁護士から電話が入った。もう遺産分割の協議は不要になったと。

「ええっ、ほんとですか、受遺しないと牧野さんがはっきり意思表示を？…何でもた…」

弁護士が牧野沙代を訪ねて遺贈のことを話した後で彼女は、私に会ってから決めますと言ったという。きつ

と直接会いに来ますのでと。さらには、塩野がなぜ遺産の全てを自分に委ねたかが解かる。言葉ではなく全幅の信頼をこういう形で示されたら、塩野からの無言の依頼に応えるのが人の道だとも。

「牧野さんから頼まれていますのでお伝えします。ぜひこれからの人生を、さおとめばなとして生きてください」

「先生、昨日ケアハウスでも牧野さんから、明日になれば分りますと言われました。先生はいまの伝言の意味お分かりなのですか」

「ええ。牧野さんからではなく、塩野からあなたへの文字通り命がけの言葉として、伝言を預かってきましたから」

頭が混乱してきた。塩野は私に何を突き付けてきたのか。何が言いたかったのか。なぜ久保弁護士や牧野沙代に解って私にはわからないのか。

「さよ？」

「もしもし、文子さん、大丈夫ですか」

塩野が階段から落ちるとき、塩野の手と私の手が虚しく離れるときの、あの「さよ」は「さよなら」ではな

くて、『もしかしたら牧野沙代の名前?』

「それはないわよお!」

「文子さん、塩野はねえ、私にこう言つてたんです。自分以外の人のために自分の時間をどれだけ割くか。それが人生の意味でしょ、価値でしよつて…」

受話器から聞こえてくる弁護士の声が、だんだん小さくなつていく。

「もういい、解らない。もうたくさん。こんな女なの、この程度の女なの。許してよ、もう。立派な人、できる人、嫌なのよ、もうほつといて。お願いだから、ほつといて…」

冷たい涙が、私の知らない種類の涙が、頬を伝い続けた。

「いらつしやると思つてました」

夫人は笑顔でさういうと、テラスに通じるサッシ戸の前でくると車椅子を回転させた。

夫人の顔が逆光で少し黒っぽくなつた。

「じゃ牧野さんはわたしがまた来るつて」

「はい。久保先生から連絡がいけばすぐにでもいらつし

やると、予想はしていました。ちよつとここ、お片付けもしておきました」

受遺者にならないのだから、もう自室に招じ入れても安心ということだろうか。それにしても、また心を読まれていた。怖い人だ。

「その真つ白な籐細工の椅子ね、あ、どうぞお掛けになつて」

真四角な鏡の前に飾り気のない化粧棚があり、半ば収納されている。背凭れを持つて引き出すと、ギツと小さく椅子が泣いた。

「塩野さんがいつもお座りになつていたのよ、そこに」

少し胸がざわついた。いくら老婆と言つても女は女だ。しかも一対一だ。二人でここに居た…

「夫はいつもどんなお話をしていたんですか」

自分で口にしておきながら、瞬きをした。夫という言葉を使ったのは自分の中の女だ。初めてだった。

「物知りな方ですから、それはいろいろなこと。わたしは自分のしてきた仕事については自信がありますが、そのほかのことには疎いので、知らないことばかりでした。お話の途中で、質問ばかりしていて聞き手としては最低



でした。一方的に自分の知識を披瀝するのは簡単ですが、素人の突然の質問に分りやすく的確に応えるのは大変なこと。そのあたり塩野さんはほんとうに見事な方でした」

私は知らないことを塩野が説明しだすと、いつも逃げた。無知を責められているようで辛くなるからだ。目の前の老女のように手放して喜べはしなかった。自然夫婦の会話は日に日に減っていった。

「あの…」と小さく手を挙げた。お茶を飲みに来たのではない。本音で語り、はつきりさせなくてはいけないのだ。

夫人は穏やかな顔のままであらずいた。

「七千万にもなる夫の遺贈をなぜ拒絶なさったんですか。もちろん減殺請求手続きはするつもりですので、その半分にはなりませんけど。すくなくとも夫の遺志はあなたに遺産の全部をと。わたし全然解らないんです。久保先生もあなたも夫がなぜそうしたかご存じのご様子。きようは恥を忍んで、教えて頂こうとお尋ねしました」

夫人の顔から穏やかさが消えていた。

「文子さん…」

強い口調で名前と呼ばれてぎくりとした。さすが元社長、そんな感じの威厳のある声だった。

「もう久保先生に包括遺贈の放棄という手続きをお願いしてあるんですよ」

「きのう、先生にこちらからお電話して伺っています。でもまだ家庭裁判所に申述つていうんですか、まだ手続きは済んでいないっておっしゃってました」

「難しいことは分りませんが、それは先生のなさる法的なお手続き。わたしはその前提になる意思表示を済ませていると申し上げているんです。先生にお伺いしましたら、相続人と同じ地位に立てる権利を放棄したということになるので、遺産の全てが本来の相続人であるあなたにと。それでよろしいではありませんか。わたしの気は変わりませんから、ご安心なさい」

夫人はなぜか、サッシ戸を少しだけ開けた。さわやかな風がそっと入って来た。

警戒心からとは思わなかった。こちらには放棄したのはなぜかと聞きにきているのだ。いや違う。塩野が何を考えてこれほど込み入ったことをしたのか。それが知りたかった。

「わたしには分りません。言ってみれば棚ぼたの大金を、  
いとも簡単に要らないとおっしゃる」

「ですから、塩野さんの無言の信託にお応えしたただけだ  
と…」

「この結果は最初から何も小細工をしない通常の相続  
と同じじゃないですか。それをなぜですか。わたしにも  
意地があります。後で戦うとしても、遺贈自体は夫の遺  
志どおりに受けて頂かないと！」

夫人の笑い声が狭い室内に響き渡った。

「小細工ですか、あなたの見方では。妻の意地、いえお  
そらく女の意地、ですね。困りましたね。これは解説す  
べきことじゃありませんので」

「解説したってバカだから分らないってことですか」

夫人がこれ見よがしに肩を落とし、ため息をついた。

「文字さん、あなたには遺産の、いいえ、お金の流れし  
か見えませんか。塩野さん、あなたの叔父さま、久保先  
生、最後に私。この心のといいますか、想いの、とい  
いますか、この流れから何かを、塩野さんのあなたへの遺  
言とも言うべきものを、感じ取れませんか」

叔父？ 夫人は叔父のことは知らないはずだ。それに、

叔父は謎を解いただけで、一連の「企て」に加担しては  
いない。

私は完全に方向を見失って唇を噛んだ。

「日村勝さんのことは先生から伺いました」

また心の中の動きを読まれた。

「…もちろんわたしが放棄の意思を明確にしてからで  
すが。叔父さまの謎解きがなければ、塩野さんのプラン  
は早々に頓挫したかもしれませんね。よほど能力を買っ  
ていらしたのね」

叔父を全く疑わなかったと言えば嘘になる。

パズルを解くように面白がっていたのに、途中から動き  
が消極的になっていった。良かったと心底思った。叔父は  
今度の「しかけ」に参加してはいない。

「この先、一人で生きられるなんて思うな」

「え？」と顔を上げると夫人の笑顔があった。

「塩野さんが残る命を捨ててあなたに教えたかったの  
はそのこと。それを五人の人たちをそれぞれの意味で信  
じ切って実行したのよ、わたしはそう理解しました」

叔父、久保弁護士、牧野夫人の三人なら分る。『あと  
二人は？』。これもまた、教えてもらおうべく、訊くしか

なかつた。

「塩野さんご自身、それに文子さん、あなた」

「わたしは入ってません。塩野はわたしをバカだと思っ  
ていましたから。だいいち、今日の今日まで今度の件を  
理解できなかったじゃないですか」

「いいかげんにしなさい！」

夫人が凜とした声で言うつと、車椅子を前に進め、近  
づいてきた。

「あなたは塩野さんのどこを見ていたのですか。これ以  
上彼を貶めると赦しませんよ」

悔しいけれど、ぐうの音も出なかつた。

「心のリレーの最後で、絶対あなたは解かつてくれると  
彼は信じていた。そうは思いませんか」

足元から震えが登つて来るのを感じた。

「もうお帰りなさい。手になさつた遺産をどうお使いに  
なるか、それは文子さんご自身がお決めになればいいこ  
と。わたしには関係ありません。あなたは幸せな人です。  
本当は塩野さんのこと、好きでたまらなかつた。最初か

らとはいいませんけれど」

「いえ、それは違います」

「ご自分で気づかなかつただけです」

夫人が車椅子を操つて、顔を近づけてきた。

「あの日、さおとめばなの先の坂上で車椅子を停めまし  
たね、あのとき、文子さんは何をしようとしたんです  
か？」

小声で、物静かな口調だった。

車椅子が滑るようにサッシ戸まで下がつた。  
隠しよりの無い震えが上半身に達している。

「こんなお婆さんに嫉妬してくれて嬉しかった。あれか  
らずつと興奮がとまらないのよ」

限界だった。夫人の口元が笑っている。

「ごめんなさい。ごめんなさい！」  
藤椅子を倒し、ぶつかるようにドアを開けて廊下に出  
た。

出口に向かつて走る足よりも、ずっと先の方で靴音が  
している。そんな気がした。無人の車椅子が追つて来て  
いるようで、振り返ることができなかつた。

翌日、叔父に顛末を報せるために電話をかけた。

「そうか、プロセスはとにかく結果は万々歳じゃないか、

良かったな、文子」

いつもながら叔父の声は、いい年をして元気いっぱい  
で青年並みだ。

「久保弁護士にはよろしく頼んどくよ。不動産の相続登記、有価証券の名義変更、預金口座の始末、それに相続税のこともある。悪いけど俺はやってやる時間無いんだ。文子、あの先生には心を開けよ、彼も男だけどな」

「もうそのことは勘弁して。もうすでに男、男で助けてもらっているんだし、牧野さんもお婆さんなのに男だし」  
「何だそれ。先生はな、お前の心まで真つ直ぐにしてくれるから。そういう人だ」

「だからもう解ったって！ 私は曲がつるつて認める。もう自分だけの力で生きていけるなんて二度と思わないわよ」

「ほーお、これは驚いた」

一晩泣いて、省みて、憑き物がとれた。そんな感じだった。

「そうだマサルさん、一つ教えて。どの段階で気づいたの、全部、私の行く末を案じた塩野がしかけたことだったって」

「まあ、どうでもいいじゃないか、そんなこと。塩野が  
凄い奴だつて分ればそれで充分」

たしかに大した人だとは思った。途中で誰かが裏切れば私の取り分はもしかしたらゼロにもなる。それを無案件に信じ切れるのだから。

「言わないと、マサルさんの謎解きは、初めから塩野のシナリオどおりに演技してただけだつて、バカにしちゃうけどいい？」

鼻先で笑うことも忘れずに付け加えた。

「そうきたか。久保先生が塩野の遺言の説明会を二度に分けてやったとき、かな。詳しいおまえの報告も手伝つて、誰を護っているかがチラツと見えた。確信はなかったけどな」

やはり途中で叔父は「企て」に参加していた。

「ふーん、そうなんだ」

「なんだその言い方は。もう切るぞ。これでも忙しいんだ」

「あの婆さんの言う通りなんだ、そうなら。四人で結託して私をいじめただけじゃない、結局、冗談じゃないわよ、バカにしないでよ！」

「おい、文子おまえ塩野の想いを理解したんじゃないのか」

大きな音を立てて受話器を置いた後で、何かに憑かれたように着替えを始めた。

「そうそう二十九歳かあ、あんたも見てらっしゃい三重人格女あ」

怒りの矛先が急に変わった。

早川泉に「お札」をしに行くと言ったのだ。

「くそっ何なの。十万のままでいいか、自慢の胸元に突き付けてやるんだ、みんなしてバカにしてえー」

自分の預金通帳が入った和箆筒の抽斗を思い切り引いた。勢い余って抽斗ごと抜けた。中身がばらばらと畳の上に着ちていく。

しばらくの間、床に散らばった、自分の生活を守るはずだった書類のあれこれを眺めていた。

なぜか涙が一気に噴き出した。

と、そのとき――

電話のベルが鳴った。

「はい」と出て、急いで右掌で涙を拭った。

「塩野文子さんですね、久保です」

「お世話になってます」

「昨日牧野さんのところへ行かれたそうですね」

弁護士、初めて聞く重く沈んだ声だった。

「ええ、はつきりさせたいことがあります」

「そうですね。用件に入ります。牧野さんはあなたの強いご希望に従う形で、塩野からの包括遺贈を承認するそうです。あなたの女の意地に負けましたとおっしゃっていました。独りで生きるといふ、あまりに見事な、強い意志には僕も感銘を受けました。法的な処理は追ってご報告いたします。では――」

「あ。もしもし先生、もう彼女はとつくに拒絶したのではなかつたのですか」

「よかつたですね、法的処理はまだでしたから」

「だって意思表示したって、牧野さん先生に」

「では、その牧野さんの包括遺贈を放棄するという意思表示の存在、どなたか証明できますか？」

しまったと思った。私は、これ以上はないという利害関係者だ。塩野の心に共感した二人はもう連携していたのだ、たった一日で。たぶん牧野沙代から久保弁護士への短い一言で：遺産をそのまま渡す価値は私には無い

との見解が一致していた。そう、叔父の日村勝も、その点ではもう一緒だろう。

「わかりました。では遺留分の方、お願いできますか」  
施設に行つて直接啖呵を切っている以上、そう言うしかなかつた。つまり自分から受遺者になるようにと、激しく迫つてしまつたのだから。

「遺留分滅殺請求を正式になさるとそのあとで包括受遺者である牧野さんとの間で具体的な遺産分割の話合いがありますから、どなたかほかの方に頼つてくださいますか。私は以前も申し上げましたが基本的に塩野の代理人ですから、あなたが塩野の遺志を受け継ぐ気持ちが無いとなれば、いままでのようには参りません。そう、そう日村さんが親族、叔父さんでしたよね」

「はい。いえー」

叔父にも怒鳴つてしまつている。

だから嘘だ、弁護士も叔父が途中から塩野側になつたと知つている。言葉で打ち合わせなくても、相互に連絡を取らなくても、彼らは以心伝心でまとまつているのだ。「いいんですか？ 法律家が事実を曲げたりして。いいえ、人として恥ずかしくないんですか、あの女はともか

く先生まで！」

いったいこの人たちは何なのだと、頭の中で整理が付かなくなつてきた。

「あの女、ですか、牧野さんのことを……こんなことは普通なら申し上げないんですが一言。人として恥云々など、あなたにだけは言われたくありませんね」

「だつてお高くとまつて、きれいごと並べて結局、やっぱりお金欲しいつてことでしょ、グスじゃないですか十分」

「受け取つたお金は市の福祉課へ寄付するそうです牧野さん。こうなつた以上一番塩野さんの想いに適うかもしれませんのでおっしゃつていました」

信じてたまるものかと思つた。

「訴えますよわたし、先生を」

「ご自由に。もう故人ですが塩野は今も私の親友です。このことを忘れないでください。——では後日必要に応じてまたご連絡をします」

最後まで久保弁護士の言葉は事務的で冷たかつた。

『突きつけたかつたんでしょ、独りじゃ何もできはしな

いんだよつて。でもね、でもねえ！」

こんな遺産の知らせ方つてあるだろうかと、そう思う。目の前の骨壺をコツンと小さく叩いてみた。

『いい気味でしょ、あんたがずつと言いたかったことが実現したんだから』

仮設の仏壇の上から、遺影、花、蠟燭、線香と、順に下して段ボール箱に収めた。

「——いつそ何にも知らなかったほうが、いや、借金を遺されては困るけど遺産なんか一銭も無かったほうが良かったかもしれない、気持ちが悪く。あんたをとことん罵つてやれたから」

『着替えなくてもいいや』と立ち上がった。もう外面を整える元気もなかった。

用意したお礼のお金をまた拾い上げて、部屋着のまま階下に降りた。

午前中だったので案の定、早川泉は外出していなかった。

「怒らないで受け取ってくださいですか。こんな形でしかあの日のお礼がでなくて悪いんですけど」

入口のドアが後ろで閉まるのを待つて奉書封筒に入

れたお金を差し出した。視線を落とすと、目の前の若者は、ぴつちりとした部屋着で圧倒的に女だった。

「あくまでも事務的になさりたいんですね、ここで押し問答はしません」

彼女は頭を下げて受け取ってくれた。

「たぶん私が同じ立場なら同じようにしたと思います。お礼をしないということは相手を身内と認めることになりませんものね。辛いですものね」

悔しいけれど読まれている。

「：ありがとうございました」と屈辱の私。

「領収証かなにか必要でしょうか」

「いえ、とんでもない、そのままでは」

欲しいかなと思う、もう一人の自分が居る。

「あの、お引越しか何かですか」

彼女の後ろの奥の方に運送屋のマークが入った箱が積んであるのに気付いたのだ。

「あ、はい。父の介護のために戻れと母が。もう要介護で十年も寝たきりなんです、母も疲れ果てたんでしょ、ね、もう送りだけでは済まなくなつたんでしょ、仕方ありません」

「失礼ですが、実家はどちらですか」

「東北の山奥です、熊も猪も出るくらいなの。訛り、気づかれたでしょ、いくら注意してもフツと出ちゃうので、ずいぶん職場でからかわれて、二度目のお店から汚い言葉を使うようになりました。お客さんは面白がつてくれるし、店の女の子は怖がつて小馬鹿にしてこないし」

水商売にも乱暴な物言いにも訳があつたのだ。小さく笑つた顔が寂しそうに見えた。

「すみません余計なことを聞いてしまつて、では、お元気で」とドアノブを握つた。

「塩野さんも肝臓癌で長いこと精神的にも苦しんでいらしたので、田舎の父と想いの上で重なつてしまつてついで、ごめんなさいね」

「え？ あなたには癌のこと話していたんですか」

「はい。え、とおつしやると奥さんには」

膝が崩れそうな衝撃だつた。掴んでいたノブに力を入れて耐えた。

若い彼女の口元が小さく嘲笑つたように見えた。

「奥さんに言わないなんて塩野さんひどい——」

後の言葉は聞こえなかつた。勢いよくドアを開け外廊

下を走り、階段を二三段昇つたところまでへたり込んだ。

胸が締め付けられるように痛かつた。

「自業自得……ざまはないわね」

また涙だろうか。昇つていく階段が霞んで見えた。

——君も来るかい？

塩野の声が聞こえたような気がした。

振り返ると、そこには当然、誰も居なかつた。

——川つてな、違う水が次々にやつてきてきているのに、僕らの目に見える川面の姿は同じなんだ。それつて凄いいことだよ——

『わたしには分からない……何一つ』

コーポラスの傍を流れる川の瀬音が、急に大きくなつたような気がした。

(完)